森陽

雨月の人

篠田達明

海越出版社

篠田達明

雨月の人

海越出版社

篠田（しのだ）　達明（たつあき）

昭和12年愛知県一宮市生まれ。
名古屋大学医学部卒。昭和43年より愛知県心身障害者コロニーに勤務。現在、同こばと学園園長。
『浮世又兵衛行状記』（文藝春秋）などで過去5回直木賞候補となる。代表作に、『にわか産婆・漱石』（第八回歴史文学賞・文春文庫）、『法王庁の避妊法』（文藝春秋）、『信長を撃て』（新潮社）等。

雨月の人

一九九二年四月二十九日　第一刷

著者――篠田　達明
発行人――天野　作市
発行所――海越出版社
〒461　名古屋市東区葵1の26の12
電話　〇五二・九三五・八四五八㈹
振替口座・名古屋5―6492〇

印刷所――図書印刷株式会社

定価はカバーに表示しています。

©TATSUAKI SHINODA
1992. Printed in Japan
ISBN4-87697-134-X
落丁本・乱丁本は海越出版社にお送りください。お取り替えします。

雨月の人◉もくじ

《目　次》

京の問答 ―― 7
怪しい物売り ―― 29
伊勢へ ―― 44
赤船太夫の邸 ―― 53
奇怪な神楽 ―― 70
古市の宴 ―― 82
松坂の宿 ―― 97
白魚神社の決闘 ―― 109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

千代の目 137
三人の町方衆 156
二見ヶ浦 172
伊勢の城址 194
男と女 206
大淀城の乱闘 235
渚の決闘 267
浪華へ 292
わが寿命 309
主要参考文献 314

装丁　西　のぼる

雨月の人

京の問答

「すると大人は、古代人のことばに、『ん』の音はなかった、と申すのか」
上田秋成は、大きな目をむいて、かたわらに立つ本居宣長を問いつめた。
「むろんのこと」
宣長は自信ありげに秋成を見返した。
「それ、その、むろんなることばはんの音がなければ話せんのや」
秋成はにやりとした。
「む」
宣長は細いが濃い眉をひくりとさせて応じた。
二人は、その庭園の池のまわりにめぐらされた園路の途上にむかいあって立っている。
園路を歩いていた二十人近い同行の者も、秋成と宣長をとりまくようにして立ちどまった。
かれらは、三々五々、池のほとりを散策していたのだが、いつのまにか、秋成と宣長の問答の

ほうにあつまってきた。
「御説にしたがえば、上古の者は、だれひとり、んを使わずにしゃべっていたことになる」
そんなことがありますかな、といった表情をして、秋成は腕ぐみをした。
「もし、んを使わへんなら、古代の人は、一、二、三、の三を、なんと読んだのじゃろ」
太い首をのばして秋成がせまると、背の高い宣長は秋成をみおろすようにして、
「それはサンとは読みませぬ。三はサムなのです。したがって、三郎とあれば、サムロウと読むのが正しいのです」
とりすました口調でいう。
上田秋成は四十代のおわり、本居宣長は五十代のはじめで、ほぼおなじ年ばえである。
しかも、おなじ町医者同士ときている。そのうえ、二人とも医業のかたわら、国学や短歌に身を入れている。その学風も、互いに国学者賀茂真淵の学統である。
しかし、風貌といい、服装といい、身のこなしから物のいい方まで、二人は、まったく正反対というほかなかった。
秋成は、土着の侍か、百姓のように色黒でがっちりした体形である。背は低く、頭でっかちの坊主頭で、てっぺんが少しへこんでいる。だから、後頭部が突きでたようにみえる。丸顔ではあるが、顎骨が張っている。その額に三本の太いしわがならぶ。目と耳は大きすぎるほどだ。眉毛は多く、末になるほど豊かでさがり気味になる。鼻はほどほどの大きさだが、小鼻がひらいてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。口は小さく、しまりがある。こんなふうに、顔の道具立ては、てんでばらばらで風采はあがらぬが、全体の印象はどことなく愛嬌がある。

宣長といえば、やせぎすの色白で、役者のようにととのった顔をしている。目は細長く吊りあがっている。鼻柱は高く、かつ節がある。口もとだけが、秋成に似て非常に小さい。声はよく澄み、よく通る。しかも弁舌きわめて流暢なのだ。

服装も、秋成は質素な麻の十徳を無造作に着るが、宣長は上物の黒い薄絹の羽織を着こなし、銀のこはぜのついた白足袋をはいている。

宣長の伊達ぶりは、そのまげにもあらわれている。油でねりかためた茶せんまげを前倒しにした一種独得の結いまげである。

「音をあらわす文字を用いる西の国々のことばにも、ん、と呼ぶ一定の文字はありません。それはんが音ではなくて韻だからです」

宣長は問答をつづけた。

秋成はそれをきいて宣長をさえぎるように左手をあげた。その左手の人さし指は、幼いころに患った疱瘡の後遺症で鉤のように曲がっている。右の中指も小指ほどにみじかい。が、秋成はそれらをかくそうともしない。

「三郎を、サンともサムともサブとも読みわけるのは、自然の音便であって、連声や」

と秋成はいった。

「たとえばでんな、『いざ、行かん』といったときの行かんは、上からの連声にしたがって、んの音が自然にでたもんや。このんの音をあらわすのに適当なかながみつからなかったから、上古の人は牟や毛をこれに当てたんや」

こんどは宣長がつよくかぶりをふった。宣長は袴の腰に赤い緒のついた古鈴を結んでいた。それが羽織の下にちらりとみえ、かすかな音をたてた。

「連声にしたがって、んの音がでてきたのは中古以来のことで、上古には、決してそのような音はなかったのです。ん音は、音便によってくずれた不正の音です」

「その説はうなずけまへんな。自然の音声に古今の区別があるとは思えまへんから」

秋成は先に立って歩きだした。宣長はその秋成の背後に声をかけた。

「いまのことばにん音があるように、上古の人にもん音はあったのでしょう。しかし、それは正しくない語音ですから、中古までは正規の言語として、決して用いられなかったのです」

秋成は立ちどまった。宣長の口調は丁寧というよりは慇懃無礼にきこえた。

「あいうえおの五音、あかさたなはまやらわの十行、しめて五十の清音こそ、正規の語音であって、んなどという見苦しい音は、いささかも数のうちに入れなかったのです」

「ん、が見苦しいと」

秋成はさがり気味の眉毛を引きあげるようにして宣長のほうをふりむき、

「では、大人は、んの音をださぬのか。厠でいきむとき、んー、とうなり声を立てぬのか」

「その厠できばるんのうめきこそ、見苦しきかぎりのものです。見苦しきものは、かくさねばなりません。ふんどしの中におさめておくのがよろしいのです」
「そうはいっても、どこの寺小屋に、いろはのはじまりから、ゑひもせず、ん、まで、ん音を教えぬところがありまっかいな」
秋成は論争に引きずりこまれて、ついむきになった。
「んがなければ、たくあんはたくあ、一、二、三は、いちにさ、たいこどんどんは、たいこどどと、わけのわからぬものになりますわい」
「そのようなときこそ、上古の人は、すべてむと発音していたのです」
この学者先生、少々しつこいな、と秋成はうんざりした。が、ここでやめてしまっては、秋成の社友の手前、ひっこみがつかない。社友というのは、秋成の医学と儒学の師である浪華の都賀庭鐘の門下のことである。その場にいたのは、秋成の社友が十数人、宣長が伊勢から連れてきた若い門人が二人、そして京坂に住む宣長の知己が数人という顔ぶれだった。いずれも文人、茶人、俳人、歌人、商人、医人といった面々であり、中には僧侶や神官もまじっていた。
「では、上古にもん音があった証拠を申そう」
秋成は顎に生えたまばらな無精ひげを引っぱった。
「いわはるとおり、んは韻であって、漢字にはんの韻をもつ文字がぎょうさんある。その字を借りてんをあらわしたものが『万葉集』にはあちこちにでてくる。見るに点で見点、行くに覧で行

覧、別れるに南で別南、告ぐに兼で告兼などがそれや。これらの漢字がすべてんの韻をもっていることは否定でけへん。けど、上古には、一字でん音をあらわす文字がなかったために、牟、無、武などの文字を借用したんや」

まわりにいた社友たちが、なるほどとうなずいた。だが、宣長は、かすかに笑って、

「おぬしのいわれるてん、らん、なん、けんのたぐいは、上古では、てむ、らむ、なむ、けむときちんと発音していたのです」

声音はものやわらかだが、宣長の目つきは、相手をみくだしているように秋成には思えた。

「これらを、点、覧、南、兼の韻をもつ漢字で書いたのは、んが音声としてむに近いので借りたにすぎません」

「ふむ、では、その証拠は」

「そのような借用例はいくらでもあります」

宣長は首肯した。宣長は自信ありげにまっすぐこちらをみてしゃべるが、秋成は、横をむいて話をするくせがある。

「たとえば地名の丹波は、多爾波とか太爾波と古書にあっても、たんぱといっている例はみつかりません。たにはは、中古以後になると、音便でくずれてたんぱとなまったので、のちに、丹波の字を当てるようになったのです」

それが正しいかどうか、とっさにみきわめはつかなかった。だが、このような問答は、その場

でぱっと切り返さねば分がわるい。しかし、それは秋成にとってもっとも苦手なことである。あとでじっくり考えるたちなのだ。とはいえ、いま、大勢の社友のまえで恥はかきたくなかった。

秋成は宣長にきょうはじめてこの別荘で出会った。引き合わされたときから、相手に異質なものを感じた。

伊勢の松坂に、医業のかたわら、『古事記』や『源氏物語』の講釈をする者がいる。なかなかの学者と評判で、諸国から弟子入りする者が多い。本居宣長というのがその学者だが、いま京都にきているからいちどお会いしてみませんか。日ごろ、親交をむすぶ社友の羽倉信美にそう誘われ、近所に住む薬種商のしじみ屋清吉と同行して船で淀川を上った。信美が招いたのは洛北にある別荘だった。

秋成は門をはいって、はたと立ちどまった。

外観はひなびた建物だったが、奥に春の匂いをただよわせた庭園がある。そこにはひろびろとした池が水をたたえ、芽ぶいた蓮におおわれている。池の東に島があり、板橋がかかっている。洛北の山々を借景とし、かつ樹林、竹林、築山などをほどよく配して幽玄のおもむきを呈している。無粋な秋成の足をとめるにたるみごとな造りだった。

「どなたの作ですのや」

秋成は案内した信美に庭園の作者をたずねた。

「小堀遠州の流れをくむ作風ときいております」

信美は答えた。

「さようですか……」

秋成はある種の感慨をおぼえて庭に目をはせた。噂によれば、秋成の父というのは、小堀家の流れをくむ武士であったときいていたからだ。その父は、秋成が生まれてまもなく、どこかに逐電したらしく、いちども会った記憶はない。

「ここは回遊式の庭園です」

遠い所に目をはせている秋成をみて、信美はいった。信美は京の鴨川べりに住む稲荷社の若い神官である。きょうの集まりの亭主をつとめたのだ。

「あなたがこの別荘をお持ちなのですか」

秋成はかしこまったことばできいた。なにかかわったことがあったり興奮したとき秋成の浪華ことばが引っこみ、改まったいい方で話すくせがある。

「冗談やおまへん」

信美は顎の長い色白の顔をよこにふり、

「ここは、さる殿上人の別業ですねん」

信美は、その殿上人の仲介人に、なにがしかの席料をはらって借りたのだといった。

安永（江戸中期）の当節はやんごとなき御方も、なにかと物入りで、このような副業にはげむらしい。借り主の中には、お得意を招いて宴をはるばかりでなく、ときには茶屋の女や人妻たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com